

## 国際教育ワークショップ

「地球市民を地域とともに育てよう Part 6  
～食べ物をとおして世界のことを考えよう～」

## 平成 19 年度 (2007 年) 国際教育ワークショップ

### 「地球市民を地域とともに育てよう Part6

#### ～食べ物をとおして世界のことを考えよう

日本の食料自給率は 40%。海外で生産された食料に依存している豊かな日本の食生活の裏側には、食糧事情に恵まれない国々の飢餓問題や安全な飲み水の不足といった問題にもつながっていきます。今回の国際教育ワークショップでは、わたしたちの食卓にならぶ食べ物と他の国の飢餓などの問題との関係やフードマイレージを学ぶことで環境に及ぼす影響などについて考え、わたしたちの日常生活をみつめなおします。



#### <午前の部>

### ■ 「世界と地球の困った現実～食べ物編～」

#### <全体>

日本国際飢餓対策機構に入り、海外駐在スタッフとしてボリビアでボランティアをされていた大津市出身の河合朝子さんのボリビアでの体験談の後、同対策機構の監修で製作されたフジテレビ放映『あいのり』のビデオを観て参加者が各テーブルでディスカッションし、感想を発表。全体の総括として同対策機構で国際協力隊総主事の清家弘久さんの講演で午前中のワークショップを終える。

#### 日本国際飢餓対策機構の活動とは・・・

1983 年、一人の女性から活動が始まり、現在はアジア、アフリカ、中南米で活動を展開。そして海外駐在スタッフという形で、たくさんの人を派遣している。

国際交流には「人づくり」が大切である。その国の人の意識が変化することで、国が造られていくということ。そういう意味で国際協力とは、人が人に関わっていく『働き』なんだということ。また、そういうものを我々が受け取って、日本の多くの人に伝えしていくという使命がある。

### 【その 1 / 河合朝子さんのボリビアでの体験談 (日本国際飢餓対策機構海外駐在スタッフ)】



#### <河合朝子さん●プロフィール>

滋賀県大津市出身。大学時代に農業を学び、1 年間、フィリピン大学に行きマンゴの研究をする。その後日本国際飢餓対策機構に入り、2004 年 11 月から 3 年間、ボリビアで海外駐在スタッフとして奉仕。

私は 2004 年の 11 月から 3 年間ボリビアで奉仕活動をしました。その時の様子をお話します。私が派遣されたボリビアのチャヤという地域は、標高が 4000m と富士山よりも高いところです。ジャガイモの原産地で、人々はインカ時代以前からそこに定住してジャガイモを栽培して暮らしてきました。

いつも寒い風が吹きすさんでおり、きちんと世話をしなければ木も生えないような所です。栽培されているのはジャガイモの他、最近健康食品でもよく見られるキヌア、家畜用の大麦やエン麦で、農作業は家族や親戚の

者みんなで一緒にします。ですから子どもたちは働き手としてとても大事な存在です。一家族に子どもはだいたい平均 4 人ぐらいですが、8 人きょうだいという家族もありました。子どもは、3〜4 歳にはもう水くみや羊の放牧といったお手伝いができるようになっていきます。小学校に上がると、両親と一緒に畑に出てくようになり、12 歳にはもう、一人前の働き手として立派に家の手伝いをすることができるようになります。そしてボリビアの教育制度ですが、小学校を初等部といって 8 年間勉強します。その後中等部で 4 年間勉強し、計 12 年で日本と同じ高校卒業の資格が得られるようになっていきます。

私たち日本国際飢餓対策機構の一部門に世界里親会があり、ここでは子どもたちの教育支援に重点を置いて奉仕をしました。1999 年から世界里親会の支援が始まり、学用品の支援や学校給食の支援をしました。というのは、教育がそれほど定着していないので、お金を出して学校の教材を買うという概念がありません。だから両親にとって、勉強のために鉛筆やノートを買うというのは理解しがたい。また子どもたちは、3 時間ぐらいかけて学校まで歩いて来ますので、学校に着いたらお腹が空いてしまって勉強に全然集中できない。それで、給食の支援も始めました。

支援を始めると、やがて子どもたちの出席率も上がってきました。また 2003 年には中等部もでき、進学率も増えてきて中等部を卒業する、つまり、日本でいう高校を卒業する子どもたちが出てきたのです。高校卒業程度の教育を受けるとことは大変名誉なことで、卒業式の時には村を上げてのお祭りが行われます。だいたい 1 期生は 10 人ぐらい、その後も 10 人から 15 人ぐらいが毎年卒業します。

村で思春期を迎えた子どもたちの世界観ですが、町の文化と自分たちの文化の狭間で戦っているなと感じました。週末や学期休みになると出稼ぎに行き、お金を貯めて町の人たちと同じような服を着たりしています。ですから中等部に入ってもそのまま中退してしまう子どもが多いという印象がありました。そんな中で私たちは、学校で一生懸命勉強している一人ひとりが村の自立支援のリーダーとなっていきべき存在なんだよということを、様々な講習会や活動を通して伝え、子どもたち一人ひとりを励ましてきました。

その中から、この村を良くしてくことに目覚めた青年が出てきたのはとても嬉しかったです。エドワルト君といって、チャヤの中等部の第 1 期生です。彼は農業を通して村の発展のために働きたいという夢を持っていたので、私たちは奨学金を出して彼を農業の専門学校に送り出しました。勉強中は日本国際飢餓対策機構の支援だけではなく、お父さんが町に働きに行き、毎日の金銭的な支援をし、家族でエドワルト君が勉強できる環境を整えました。こうした家族の積極的な姿勢が見られたのも、私たちにとって嬉しいことでした。現在エドワルト君は 26 歳で、チャヤの学校寮で職員として働き、子どもたちに野菜を食べる大切さや上手な野菜の育て方を教えています。そんな姿を見るとき、人が育つということは地道な時間をかけた働きなんだなあとと思うのですが、私たちはそういう息の長いプロセスを通して人づくりに仕えている団体です。

以上、ボリビアでの報告をさせていただきました。ありがとうございました。



▲河合朝子さんのボリビアでの報告風景

## 【その2／フジテレビ放映『あいのり』のビデオ鑑賞と感想発表】

『あいのり』とは・・・男女7人が「ラブワゴン」という車に乗って世界を旅し、その国々の文化に触れながら恋愛ゲームを繰り広げるという番組。ディスカッションの題目は最後に参加者が車座になって話をする場面。その場面でどの言葉に共感・反応するかを話し合う。〈場面内容〉エチオピアを旅した若者達が自分たちは食料など、全てにおいて無駄にしている生活について反省しかけるが、一人の女性が「今はそう思っているけど、日本に帰ったら同じ生活をしている」と発言。その一言で若者達が再び議論し合う。



「グーグルアース」を使ってエチオピアまでの旅を疑似体験する。



### <8グループの感想>

#### [A テーブルの感想]

どの方も自分の経験と照らし合わせてお話し下さいました。小学校の先生が、アフリカの子どもがお腹が減りすぎて石を食べているというビデオを小学校の給食週間で子どもたちに見せたら、それに感銘を受けた子が、自分が給食を残してしまったので泣いてしまった話をしてくれました。一人ひとりの意識を変えていくのは、誰にでも出来ることなんだと思いました。ビデオの中の意見ではトイレトーパーを使う量を減らすなど、毎日の生活の中で少しずつ出来るのではないかという主張がよく伝わってきました。



『あいのり』のビデオ鑑賞



#### [B テーブルの感想]

ビデオの中でトイレの話が出ましたが、ここにはマイ箸を持っていらっしゃる男性が2人いて、立派だなと思いました。それから、紙おむつの話が出てきました。生活が便利だから紙おむつを使っているとのことですが、私の時代は全部、さらしのおしめですから、娘も徹底して紙おむつを使わないように教育しました。今は家庭教育が潰れているからいろいろな問題が大きくなってきているんです。それと企業がずるくなり、社員教育せず派遣を使うようになった。これも大きな問題です。教育も家庭環境から、ものを残すのも家庭環境から、食事の問題も全部残すのも家庭環境です。家庭が潰れないように、今からの若いお母さん方、お父さん方はしっかり家庭を守る両親になって欲しい。家庭教育がしっかりしたら、国はしっかりしていくと思います。



### [Cテーブルの感想]



全体を見た感想や反応を聞いたのですが、どちらも努力するべきだということと、持続していくのは難しいという両方、どちらも重要だという意見が出ました。また話し合う場になったということ自体が重要だったという意見もありました。食べ残しに対する話題についても話が及び、食べ残し自体よりもそのシステム、もっと食料が行き渡るようなシステムが重要なのではないかという意見もありました。女性の方は「緑の革命」のことも触れられて、「何とかしないと」という意見が全体を変えるのではないかという話がありましたが、意識を変えていくこういう場があったことは良かった、重要であったという意見が出ました。一方男性の方の発言に対して、日本的な考えということに対する疑問も出てまいりました。日本では江戸時代までは節約された生活をしていたのですが、それが、高度経済成長期に入って大量消費社会になってしまった。だから日本的な考えと一概に大きいくりにするのは間違っているという意見がありました。

※「緑の革命」: 主として開発途上国の人口増加による食糧危機克服のため、多収穫の穀類などを開発して対処しようとする農業革命のこと。

### [D テーブルの感想]

ちょっとディスカッションの時間が短くて、話題がビデオを観た感想中心になっていたように思います。改めて驚きましたというのが多くの方の感想で、やっぱり現状を知らない人が多いのではないのでしょうか。知ってもらうこと、広めていくことがすごく重要じゃないだろうかという意見が出ました。それから、日本人として何が出来るだろうかということで、ビデオの中には「教育が重要、教育をすれば彼らは自分たちで会社を興せる」という発言がありましたが、何かをすとか、援助をするということではなくて、日本人が地産地消をする、自分の所で作って自分の所で消費するという考え方をもっと広めていけば、自給率も変わるだろうし、アフリカを含めた飢餓に苦しんでいる国の負担も減っていくんじゃないかという意見がありました。

### [E テーブルの感想]

こちらのテーブルでは、今言われた教育が大事、知ることがまず大切ということがみなさんの意見の中の中心でした。心のどこかに何か引っかかっているということが大事なんじゃないか。知ったからって急には変わらない。そんなの続くのかというもの葛藤しながらも、自分の出来ることから小さなことからするのが大事、という意見が出ました。



また、トイレットペーパーを使う量を7ターンを3ター

ーンにするという話は意外に奥深いですね、という話でまとまっていました。今回の講座に来られた学校の先生は生徒たちに伝えるだろうし、高校生のお嬢さんも来ていらっしゃると思いますが、きっと彼女は友だちに話をしてくれると思います。知らない動かないというものもあると思いますので、まず知って、伝えていきたいという思いが新たになりました。

## [F テーブルの感想]



まず自分たちの生活スタイルを変える。トイレットペーパーの使用量を 7 ターンから 3 ターンにする話みたいな感じで、自分たちの生活スタイルを変えていきたいという意見が出ました。また、先進国としての身勝手を変える。そのためにフェアトレードをもっと活用していったらどうか。これは先進国が農産物を正当な価格で買い取るという制度で、今はコーヒーでも安い価格で買い取られたものを、私たちが安い価格で買っている。それを何とか企業が正当な価格で買い取って、私たちが正当な価格で買うことによって、アフリカの人たちの生活が少しでも豊かになるのではないかと考えが出てきています。もう一つ、知ることは大切だということです。ビデオを観るまで、エチオピアの人たちがあんなに苦しんでいることや「緑の革命」の話を知りませんでした。

ですから「何てことをしてきたんだろう」とすごくショックでした。一方で、もう生活が変わってしまっているのに、そうなった今、日本として何が出来るだろうかというところで時間となりました。

## [G テーブルの感想]

ビデオの中に「日本に帰ったら結局同じ生活をしているんじゃないだろうか、私はきれい事はキライだから何も出来ない」と言っていた女性が出てきましたが、その女性と「それでも少しでもやっけないといけないんじゃないか」と言っていた男性の狭間にいるなということをみんなが感じていたようです。でも、この班の中では、少しずつでもみんなが何かしなければならぬという方向で意見がまとまっていたように思います。では何が出来る



のかということですが、一番多く出てきたのが、自分の生活の無駄を省くことから始めたいけるのでは、という意見でした。そして、いろんなことを勉強し、またそれを次の人に伝えていくことということも、取り組んでいけることではないかなということ。具体的な話としては、無印良品ではフェアトレードのコーヒー豆が売っているそうです。そういったものを購入していくという取り組みなら自分サイズでやっけていけるのでは、意見が出ていました。それから、トイレットペーパーの 7 ターンを 3 ターンにという意見は、番組の中ではどちらかというとバカな意見として取り扱われていましたが、これは非常に重みのある言葉ではなかったかということで、番組の取り上げ方とはまったく違う取り方をグループの方々はしていたようです。



## [H テーブルの感想]

まず車座の若者たちの間で「努力は続くのかと。きれい事はキライだ」という意見がありました。このテーブルは教員が多かったんですが、子どもたちの間でも「一人でやっても変わらない」という意見が実際に多いということです。でもそこで出てきたのが、何か出来たという有用感を持つこと。無駄を省き、エコ、

アフリカとつながっているコーヒー豆などで、何か出来たという有用感を持つことによって、少しずつ変化が表れてくるのではないかということです。子どもたちは「何か行動しなきゃ」という思いは持つが、続かない。そういった話が出てきました。ある先生は、5%の子どもが変わっていけば、学級がちょっとずつ変わっていくというインパクトが与えられる、そうすれば状況を変えていけると、経験上の話をされました。あともう一つは、「教育が重要」と言っていたビデオの中の歯医者さんの言葉ですが、これは、識字率の問題や女子教育の問題などに取り組んでいくことによって、その国自身を変えていけるということを知っていくということが重要ではないかということまで話を終えました。

### 【その3／清家弘久さんの講演（全体総括）】

#### 日本国際飢餓対策機構国際協力隊総主事

##### ＜清家弘久さん●プロフィール＞

1959年大阪府生まれ。大阪経済大学卒業後、神戸のKMLIで日本語教師として働いた後、1991年よりHAT(飢餓啓発教育プログラム)のディレクター、1993年より日本国際飢餓対策機構で国際協力隊総主事として働く。2004年より大阪女学院大学で、また2007年より、東京基督教大学でともに非常勤講師として教鞭を執る。



開発を英語ではデベロップメントといいます。デベロップするということは何か。デベロップの反対に近い言葉はエンベロープという言葉で、これは封筒という意味です。封筒は外にあるものを折り畳んで中に入れる。デベロップはその反対ですから、内側にあるものを開いて外側に出すわけです。つまり、開発の本当の意味は、人々の内側にある可能性を引き出してあげることですね。だから道路を造ったり山を切り開いたりダムを造るのが開発の意味ではなくて、人々の内側にあるものを引き出していく。それがファシリテーターの役割であり、そして本当の意味の開発が目指すものだと思います。だからこそ、人が人に関わっていく。そして、良いファシリテーターは励まし手となったり、引き出し手となっていくことが大切なんだと思わされます。ここにいられた皆さんは向上心がすごくあって、どんどん伝達される方もいると思いますが、それを期待しております。



まとめとして、いくつかのことを押さえておきます。まずは、この写真をご存知でしょうか？ これは中学校の英語の教科書に載った写真です。スーダンで撮られた写真で『ハゲワシと少女』というタイトルがついています。女の子がうずくまって、死のうとしているところを写したのですが、後ろでハゲワシが待っています。生と死、食べ物について、戦争のことなど様々な問題について考えさせられる写真です。これを撮った人は南アフリカ共和国のケビン・カーターという報道カメラマンです。彼はこの写真を南スーダンで撮り、すぐにアメリカの新聞社に送りつけました。すると次の日の紙面の一面に「アフリカの現状」として掲載され、ピューリッツァー賞という報道カメラマンが一番栄誉とされる賞を取りました。

しかし、カーターさんはこの賞をとった三か月後に自殺してしまいました。それはなぜかという「どうして助けなかったのか」と言われ続けたからです。おまえは人間の心を持っているのか、人間の心を持っているならどうしてこの女の子を助けないのか。彼はこう答えました。「僕は何度もこのハゲワシを追い払おうとしたけれども、ハゲワシは空に飛び立つと旋回して、また女の子の背後に降りて距離を縮めていく。どうすることも出来なかった。だからシャッターを切って、近くの民家に行ってずっと泣いていた。その後の様子は見ていない。私は見る事ができなかった」と。けれども、彼はそのプレッシャーに耐えられなくなって、現実逃避をするためにドラッグを使い、最後は自分の車の中にホースを引き込んで死んでしまいました。彼の遺書が残っていて、そこにはこう書かれています。「家族に対して申し訳ない」と。そして「自分の脳裏にこびりついて離れない現実がある。それは戦争で傷ついて死んでいく人たち、そして飢餓の中でお腹を空かして死んでいく子どもたちだ。振り払っても振り払っても、それが自分の脳裏にこびりついて離れない」。生きるのも大変、死ぬのも大変。これが世界の現実です。

でも一つ覚えておいてもらいたいのですが、途上国には自殺者はいません。1分1秒でも長く生きたい。それが子どもたちの願いであり、親の願いであり、生きている人たちの姿です。豊かといわれている国の人たちの方が、未来に絶望を覚えたりいじめられたりして自殺しているんです。

上原令子さんというゴスペルシンガーが、私たちの団体の親善大使をして下さっています。彼女は沖縄出身ですが、いわゆるダブルの人で、お父さんが米軍基地に勤めるアメリカ人だったために、小さい時にいじめを経験しています。今は親善大使として、歌を歌いながら世界の各地をいろんなところを回ってくれているのですが、彼女がエチオピアに行ったときに、お母さんたちに「あなたの夢は何ですか」とインタビューして回ったそうです。そうしたらお母さんはこんなふうに答えました。「自分の子どもが 20 歳まで生きることです」。それが自分の夢なんです。ものすごく厳しい現実があるのです。

『世界の穀物生産と自給率』を見ると、日本の食料自給率がカロリーベースで 40%を割ったことが出ていました。穀物は大切な資源ですが、今は地球温暖化防止のために、バイオ燃料化され、30%から 40%も上がっています。いよいよ、自分たちの食べ物のことを本当に真剣に考えなければならない時代になってきています。

『ホテル・ルワンダ』という映画をご覧になった方もおられると思いますが、1994 年にルワンダでも大変なことが起こりました。3 か月の間に 100 万人が虐殺されました。あの時、私たちの事務所にも「こんなことできませんか」といろんな人がお電話を下さいました。その中に一つ、忘れられない電話がありました。それは、あるお米屋さんからの電話で、ルワンダの人はお米が主食だというので、お米を送りたいという話でした。米が余ってるから、と言うんですが、実はその年は「平成の米騒動」といって、米不足のために、初めて日本が米を外国から輸入した年でした。それでよくよく



話を聞いてみると、結局、タイから輸入したお米はまずいということで売れ残ってしまい、もう次の新米が入ってくるから、倉庫を空けたいというんです。余った米はどうしているのかと聞いたら、分からないようにちよつとずつ、ゴミに混ぜて捨てていると言う。

でもよく考えてみると、先ほど観た『あいのり』で出てきた食べ残しの問題と根は同じです。つまり、ほとんどのものは外国から輸入していて、手つかずのまま捨てられているものがたくさんある。それを、大量に捨てているというのが、世界の中の私たちの食生活なんです。お米屋さんの一件も毎日起こっていることの一つにすぎないのです。

漁獲高で言うと、日本が世界の中でも相当漁獲高が多いということがわかります。一番漁獲高が多い港はどこか。釧路、境港、焼津、銚子など、有名な漁港がたくさんありますが、一番多いのは、成田空港です。成田空港という空の港が圧倒的に第一位です。それはどうしてかという、いろんな所から輸入している。そのためにODAが使われています。お弁当に入れている冷凍食品のフライなど、買ったなら食品表示で魚の名前を見てください。実は、マクドナルドのフィレオフィッシュはビクトリア湖のナイルパーチを使っています。それこそ、琵琶湖のブラックバスのように、ビクトリア湖の生態系を変えてしまった魚です。そしてアフリカの人たちの生活も変えてしまったというのが『ダーウィンの悪夢』という映画の内容でした。

日本の近海では、韓国がアナゴの密漁をしていることが問題になっていますが、基本的に私たちの考え方としては、魚というのはパスポートを持っていないわけですから、共存共栄する方法を考えていかないといけない。ここからここまでが自分の国の場所で、ここからは入ったらダメだなどと言っていると、結局争いになってしまうんです。どうすれば共生が出来るのかということ、私たちは考えなければいけないですね。

ところで、どうして日本近海から魚がいなくなってしまったのか。地球温暖化、森が荒れた、乱獲。確かにどれも原因になっていますが、もう一つ外国人から言われることは、日本人は「エッグイーター」ということです。魚の卵をたくさん食べているんです。明太子。いくら。ししゃも。お正月は数の子。「日本人は、魚の子どもや孫を食っておきながら、自分たちの周りから魚がいなくなったというのは、これは当たり前のことじゃないか」と。それを言われてから、我が家では明太子を買わなくなりましたが、そういうことに気付かされました。でも気付かされたら行動しないとイケない、ということです。

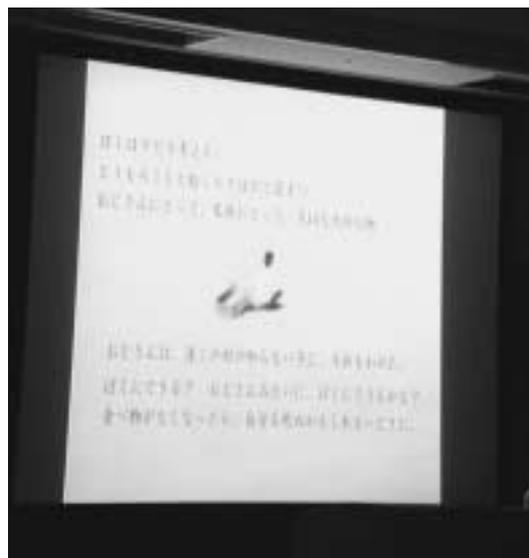
11兆円という数字があります。この数字は何かというと、日本で1年間の食料の無駄を金額に直した数字です。11兆円がもし手元にあったとしたら、1万円札を数えるだけで皆さんの一生は終わる。それぐらい膨大な金額です。毎年、日本が捨てている食料を金額に換算するとこうなります。「今日はあなたがとてもいい子だということが分かったので、おじさんが毎日お小遣いをあげます。毎日100万円のお小遣いを差し上げますが、一つだけ条件があり



それは、貯金してはいけません、必ず使い切ってください、ということです。さあ、1日目、どうしますか。1日目、遊びに行く。2日目、食べに行く。3日目、家族とか、友だちとかに配る。4日目。もう分からない。…」こんなふう、普段はお金もらったらどうしようかなと思っているけど、だいたい3日目ぐらいになると、もうどう使っていかわからなくなりますよね。土地を買う、土地買う、土地買う、などと言っても、それでも1週間ぐ

らいするとそれも飽きる。でも 100 万円ずつ毎日使ったとしても、この 11 兆円を使い切るには 3 万年かかるんですよ。毎日 100 万円ずつ 10 人にあげたとしても、3000 年かかるんです。それだけのものを、私たちはこの日本から、毎年捨てているんです。これだけの無駄をしている。そういう国なんだということです。この数字は、日本の漁業と農業の生産高と全く同じ数字です。つまり、11 兆円を作っておいて 11 兆円を捨てているということなんです。では、私たちは何をすればいいのか、ということです。『あいのり』のビデオの中に食べ物ゴミの話が出てきましたが、食べ物ゴミの半分以上は家庭から出ているものです。企業の責任などと言う前に、自分たちの家庭を見つめ直すことです。

最後に、一つだけお見せしたいものがあります。それは日本国際飢餓対策機構が作った絵本『ゴンドールのやさしい光』です。これは私たちのスタッフが、エチオピアに緊急援助で食糧配給のために行ったときの体験談です。分かち合おうとしてエチオピアまで行ったけれども、逆に分かち合うということをエチオピアの人から教えられたという話を絵本化したものです。それを皆さんにお見せして、私の話を終わりたいと思います。自分たちはどうしていきべきかを考えさせてくれるお話です。



絵本『ゴンドールのやさしい光』を見て、これから自分たちができることを考える。



<絵本『ゴンドールのやさしい光』>

アフリカ・エチオピアで食糧配布ボランティアに参加した青年のエピソードを絵本化。世界で、約 2 億人のお腹をすかしたまま夜眠りにつく子どもたちのために私たちは何ができるのかを問かける内容。この絵本は国際 NGO の現場で起こった実話をもとにした絵本。この絵本の収益の一部は、国際 NGO・日本国際飢餓対策機構の活動を通じて、世界の飢餓をなくすために使われる。

- 葉 祥明／絵
- みなみ ななみ／文
- 日本飢餓対策機構／英訳・解説

小さな努力から始まる支援がありますので、私たちの今の現実ということを考えながら、また皆さんがファシリテーターになっていただいて、人々の内側にあるものをぜひ開発していただきたいと思います。どうもありがとうございました。

## <午後の部>

### ■「食と交通と環境 フードマイレージ買い物ゲーム」

#### <全体>

あおぞら財団(財団法人公害地域再生センター)の林美帆さん指導のもと、参加者が各テーブルで「フードマイレージ買い物ゲーム」を実施。現在と1970年代の各シーズンの夕食の献立を考えて発表した後、その食材が食卓に並ぶまでのフードマイレージを計算。エネルギーの浪費や輸送時に排出される温暖化ガスや大気汚染物質などが環境に及ぼす影響についての林美帆さんからの講演で午後のワークショップを終える。

**フードマイレージとは・・・生産地から食卓までの距離(「距離×量」)が短い食材の方が、輸送に伴う環境への負荷が少ないという仮説。食料自給率が低い日本の数値は、世界で1番高いという。**

#### 【その1/フードマイレージ買い物ゲーム】



#### <林美帆さん●プロフィール>

1975年大阪生まれ。奈良女子大学大学院博士後期課程に籍をおきながら2005年、あおぞら財団(財団法人公害地域再生センター)に就職。西淀川・公害と環境資料館の運営を担うとともに、環境学習を担当している。

※あおぞら財団:公害地域の再生を目指して活動するNPO。被害者・住民の立場から地域の環境再生に向けた調査研究、実践活動を創造的におこなっている。西淀川大気汚染公害裁判の和解金の一部を基金として、1996年に設立。

#### ●フードマイレージ買い物ゲームを始める前に・・・

皆さんの目の前に食材カードが並んでいますが、今日はこれで夕食を作ってもらおうと思います。疑似買い物ゲームをやって、夕食を作ったつもりで、お配りしたマジックと紙に絵を描いてください。ただし、注意点がいろいろとあります。まずお買い物に行くには何処にいくかというのを考えてください。最初お配りした資料の中に「フードマイレージ買い物ゲームシート」というのが入っています。これを使いながら買い物をしてください。行き先は郊外のショッピングセンターか、近所のお店かを考えて、次に自転車で行くか、徒歩か、バスで行くのかも考えてください。自動車という選択肢はあるテーブルとないテーブルがあると思いますが、1970年のチームは自家用車がありません。というのは、自動車保有台数が1970年は一世帯当たり0.57台で、家庭に1台自動車がなかった時代なんですね。なので、現代は車



がありますが、1970 年は車がない状態になっています。

目の前に一杯食材が並んでいますが、日々の買い物と同じで予算があります。1970 年チームはアサリが 30 円、イワシが 50 円、大根が 60 円ととても安いのですが、予算 550 円で家族 4 人分の食事を作ってください。現代のチームはちょっと高いですが、1400 円の予算で家族 4 人分の夕食を作ってほしいと思います。ただし、主食のパンやスパゲッティ、ご飯や調味料は家にあると考えます。よく見ていただくと分かりますが、1970



年の食材カードは実は 10 枚ぐらい少ないんです。というのは 1970 年は旬のものしか買えなかった。一方現代のチームは冬になってもトマトやピーマンなど何でもあるので、食材カードも多くなっています。でも現代になくて 1970 年にあるものもある。例えばクジラ肉やフキなどです。テーブル上にあるものは同じように見えて全部違います。四季で違いますし、1970 年と現代で違いますが、皆さんは食べたいものを、テーブルの疑似家族で相談してください。

## ● 各テーブルでフードマイレージ買い物ゲーム開始



## 【その2/フードマイレージ買い物ゲームによつて献立発表（各8テーブル）】

### ◆1970年春チーム【自転車で近所の店】

このチームの売りは、4人みんなが一緒に食べられるということです。土鍋でキャベツとアサリを煮ますが、これはわずか90円でできます。あとはタケノコの土佐煮とカツオのたたき、キュウリの酢の物にデザート、イチゴまでついて550円で、みんなが満足できる豪華な夕食になりました。



### ◆現代春チーム【車でショッピングセンター】

春なので春キャベツを堪能しようと、お好み焼きにしてみました。今回のポイントは、卵、イカ、豚、ネギ、長芋などがこの間にぎっしり詰まっております。そしてお多福ソース、マヨネーズもたっぷりかけて、最後にバナナでしめます。金額は1370円になります。



### ◆1970年夏チーム【自転車で近所の店】

野菜がたっぷり入った夏カレーです。カボチャとかナスとかニンジン、タマネギ、いろんなものが入っています。その横にサラダをつけました。キュウリとトマトが入っています。ドレッシングをかけて食べます。デザートはスイカで、しめて520円です。



### ◆現代夏チーム【車でショッピングセンター】

冷しゃぶと焼きナスとイカそうめん、ブドウです。全体的にカラフルに仕上がっている感じなんですけど、ブドウはちょっと季節が違うかなあ。ナスも夏の季節とはちょっとはずれているような気もしなくはない感じで仕上がっています。以上です。



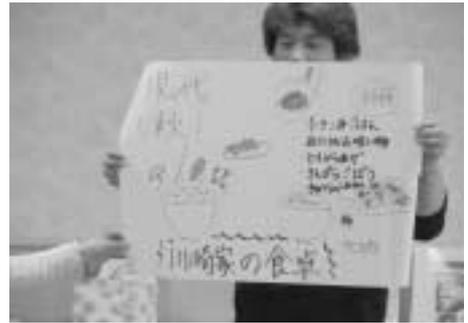
### ◆1970年秋チーム【自転車で近所の店】

今日の我が家の夕食ですけれども、ご飯、秋の根菜類の入った豚汁と、イワシの塩焼き、大根おろしとホウレンソウのおひたしと、柿です。季節のものを採り入れて作ってみました。こだわりのポイントは旬の野菜を使ったところ。大根、白ネギ、ゴボウ、ニンジン、サトイモ、豚肉の入った豚汁です。しめて530円です。



#### ◆現代秋チーム【車でショッピングセンター】

我々のメニューは炊き込みご飯、その中にはシイタケとゴボウとニンジンと鶏肉入りの豪華な炊き込みご飯です。それに、キュウリの塩もみ、アサリのお吸い物です。炊き込みご飯に使ったお肉の残りを鶏の唐揚げに、また、キュウリの塩もみで残ったキュウリをつけています。それで、炊き込みご飯で残ったニンジンとゴボウを使ったきんぴらゴボウを作りました。最後にデザートで柿がつかます。売りは 7 品目 6 メニューということです。



#### ◆1970 年冬チーム【徒歩で近くの店】

寒いので鍋にしました。その前に酒の肴が欲しいということで、カマボコをアテにさせていただきました。ご飯がなかったので芋で腹の足しにしました。予算の許せる範囲での寄せ鍋ということで、この予算はどこから出ているのかと思いますが、ちょっとお酒もつけていただきました。鍋には、カキ、アサリ、豚肉、ネギ、白菜を入れました。リンゴがデザートでしめて 550 円です。



#### ◆現代冬チーム【自転車でショッピングセンター】

現代の冬は鶏鍋になります。入っているものは、鶏肉とネギと白菜と大根とエノキという、彩りが白っぽいものばかりの鍋になるんですけども、とりあえず豪華一点主義で、これだけでご飯で食べるということになっています。ダシは最高級のものを使っています。しめて 1350 円で出来上がりました。



### 【その 3 / 林美帆さん (あおぞら財団スタッフ) による「フードマイレージ買い物ゲーム」の総括】

#### ●フードマイレージとは？

まず 1970 年を振り返ります。高度経済成長の華々しい時代で、その象徴として大阪万博がありました。その裏側では公害の問題が非常に世間を騒がせていました。またファーストフードが登場し出したのもこの時代です。ですから食生活がどんどん外食化の方に進んでいく時代になっています。例えばケンタッキーフライドチキンの 1 号店ができ、翌年にはマクドナルド、またボンカレーやカップヌードルが登場します。

今日皆さんと勉強したいのはフードマイレージという概念なのですが、これはイギリスの消費運動家ティム・ラングさんという方が 1994 年に提唱した概念です。最初はフードマイルといって距離のことだけでしたが、食料を輸入に頼っている日本の現状を指標的に表そうということで、親しみやすさという点からマイルではなくマイレージという形で普及しています。つまり、食料が生産地から消費者に届くまでの『距離×重さ』のことです。ですから遠くからたくさん運ばれてくると、フードマイレージは増えるわけです。

### ●各テーブルでフードマイレージを計算

テーブルの上に置かれている日本地図の上に、各お買物カード(品物)を置く。お買物カードの裏には産地が書いてあるので、産地の所に置くとどここの産地から輸送されたものかが分かる。

さらに封筒の中に☆が入っている。☆1個が輸送にかかったCO<sub>2</sub>、20 グラムになる。☆が何個あるか、計算して、ゲームシートに書き込んでいく。



#### 【各チームの☆の数】

	春	夏	秋	冬
1970 年チーム	9	17	20	18
現代チーム	31	27	30	11

### ●輸送で排出されたCO<sub>2</sub>の量

実は北海道のものを選ぶと輸送距離が長くなるので☆の数は多くなります。現代の冬チームはすごく少ないですが、産地が近畿に近い所になっていると思います。

この☆というのはCO<sub>2</sub>が20グラムです。これは何かというと、環境負荷の大きさです。CO<sub>2</sub>は地球温暖化の原因のガスの一つです。食材の環境負荷というのはフードマイレージ、『距離×重さ』ですが、実はフードマイレージ自体は『輸送距離×重さ』で終わりです。それを今回はCO<sub>2</sub>



の排出量に計算しなおしています。生産地から消費地までの『距離×食材の重さ×原単位』で、輸送で排出されたCO<sub>2</sub>の量になります。これで、食卓と温暖化が繋がっていることが分かります。ここには大気汚染公害のことも入っています。実は、直接的な被害を受けるという意味では大気汚染も大きいです。温暖化と大気汚染というのは排出原因が一緒なんです。

フードマイレージの算出方法ですが、今回私たちは大阪市の卸売市場年報を使いました。この卸売市場は非常に古く、昭和 30 年代からもう年報が出ておりまして、何を扱っているかも出すことができます。その卸売

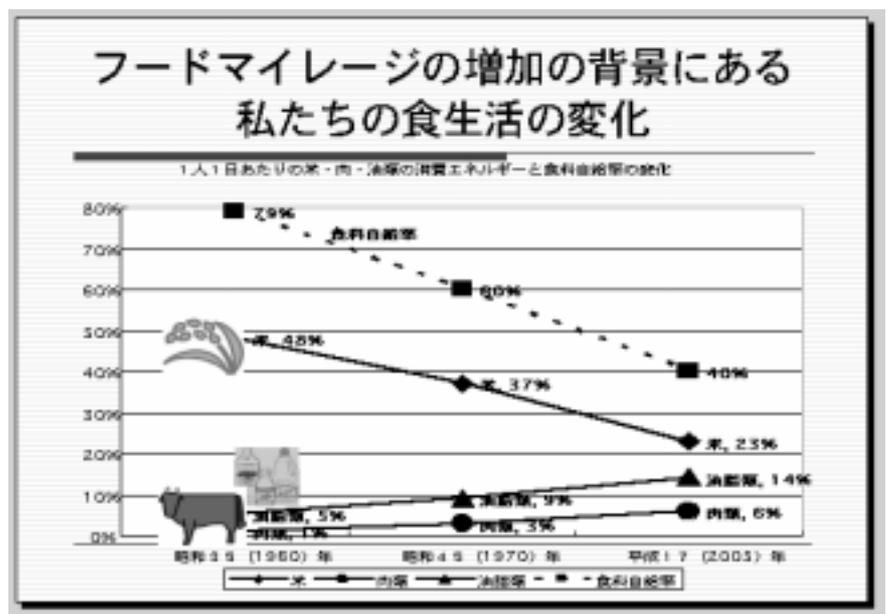
市場の年報から、値段と産地、その月にどのような品目を扱っているかが分かり、食品の産地も全部数量的に分かります。その中で一番取り扱いの多い府県を産地と算定して出しています。卸売値も年報に載っていますので、そこから店頭にかかる値段を算出しています。また、交通分担率というのが卸売年報には書いてあります。昔は、卸売市場には貨物の引き込み線がありました。鉄道輸送によって全国から品物が来ていたということです。もちろんトラックも



船もその当時から使っています。実は 1970 年の方がフードマイルが低いのは、交通手段が違ったというのも大きくて、北海道のニンジンが☆13 個だったのに対して 1970 年のチームは北海道産のジャガイモが☆が6 つです。それはなぜかという、鉄道で運んでいる部分が非常に大きい。鉄道の方がトラックよりもCO2 の排出が少ないので、☆が少なくなるということです。距離はインターネットや書籍の他、時刻表や海上保安庁が出している距離表で調べています。

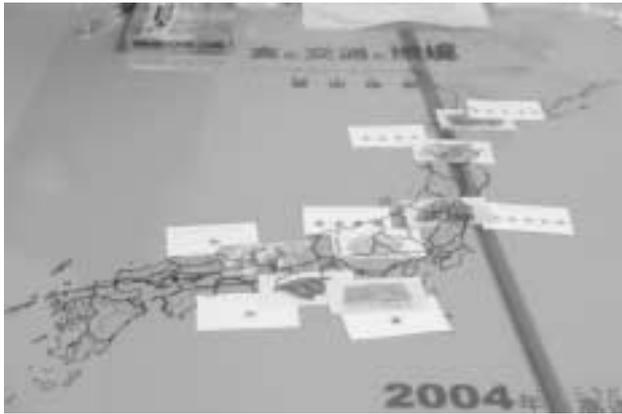
日本はダントツ、フードマイル世界一ですが、何が一番多かという、米、麦、コーン類。それから大豆、菜種、いわゆる油の原料になるものです。輸入といえばアメリカ産やオーストラリア産の牛肉とか言いますが、割合は多くありません。

食料自給率の折れ線グラフを見れば一目瞭然ですが、食料自給率がグングン落ちてきています。2006 年発表のカロリーベースの食料自給率は 39%で、ついに40%を割りました。実線の折れ線グラフは 1 日の中で私たちはエネルギーを何から得ているかということですが、1960 年は米からが



きて 23%、1 日のエネルギーに占める米の割合は 4 分の 1 になっています。その分上がったのが油と肉。油は 1960 年は 5%だったのが今はその 3 倍の 14%。肉は 1%だったのが 6 倍に増えて 6%になりました。肉が増えたのに対応して、国内産の牛の飼料の輸入が増えたということです。

都道府県別の食料自給率も出ています。滋賀県の食料自給率は 51%で、全国で 18 位という数字になっています。ちなみに1位は北海道で自給率は200%。一番低いのは東京で、自給率は1%です。大阪がワースト2で2%、神奈川がワースト3で3%となっていて、100%を越えているのは北海道と秋田、山形のみとなっています。

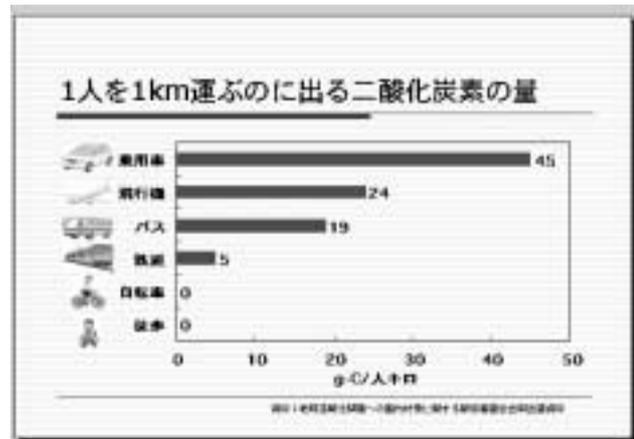
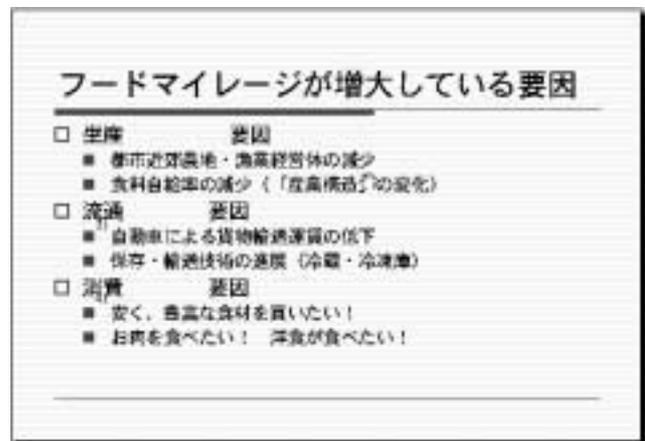


では、皆さんの地図の上に高速道路網を重ねていきます。この日本地図を貼ったシールの上に重ねてください。現代は赤です。1970 年は非常に少なく、東京-西宮間しかありません。現代は網の目のように高速道路網があります。昔は高知県などで促成栽培の野菜が作られていましたが、現在は九州で作られてトラックで運ばれてきています。輸送手段で排出するCO2 というのも右肩上がりです。上がっていて、実は、国内でも2割ほど交通が占めるCO2の量というのが問題になっています。実は交通も温暖化の原因になっています。

二酸化窒素はぜんそくの原因とも言われ、大気汚染物質を測る指標の一つになっています。二酸化窒素の数値0.06は環境基準値の上限値であり、平均が0.06を越えた日数という表を作ってみました。そこで、滋賀県は空気がきれいではないかと思ひ、大気汚染の測定をしている滋賀県琵琶湖環境科学センターで調べてみると、大津の逢坂区域は二酸化窒素の濃度が環境基準値を越えた日数が多い地域になっています。確かに滋賀は高速道路や国道1号線も通っていて、交通の要所であり、流通の拠点になっています。遠い話だと思って聞いていた大気汚染の問題が、実は自分たちの身近にも起こっているということを心に留めてください。

●**フードマイレージが増大している要因**

フードマイレージが増大している要因ですが、一つは生産要因です。都市近郊農地、漁業経営体の減少、食料自給率の減少、産業構造の変化。こうした生産の要因があげられるということです。もう一つは流通要因です。自動車による貨物輸送の賃金が低下していることや、保存輸送技術の進展があります。1970年ぐらいから、コールドチェーンという冷蔵冷凍輸送が発達していきます。それまでは、新鮮なものは生産地に近いところでしか食べられませんでした。遠くからでも新鮮なものを取り寄せることが出来るようになりました。皆さんも今日ゲームで体感してもらったかと思ひます。もう一つは、輸送技術が上がって、旬以外のものでも手に入れることを可能にした流通要因は大きいです。季節的に滋賀では出来ないものであっても、九州や北海道なら出来る。例えばカボチャだったらニュージーランドとかトンガなど



からよく来ていますが、そういうふうに、違う地域なら運べば何とかなるということに来ていたということになります。最後の一つは、安く豊富な食材を買いたい、お肉を食べたい、洋食が食べたいという消費要因です。これが一番大きいです。どうしても私たちは安い方、安い方ということで選んでいます。これはフードマイルージが増えている最大の要因ですが、洋食を好むようなライフスタイルですね。油や肉を食べる量が増えたというライフスタイルの変化は、やはり消費要因が大きいということになります。

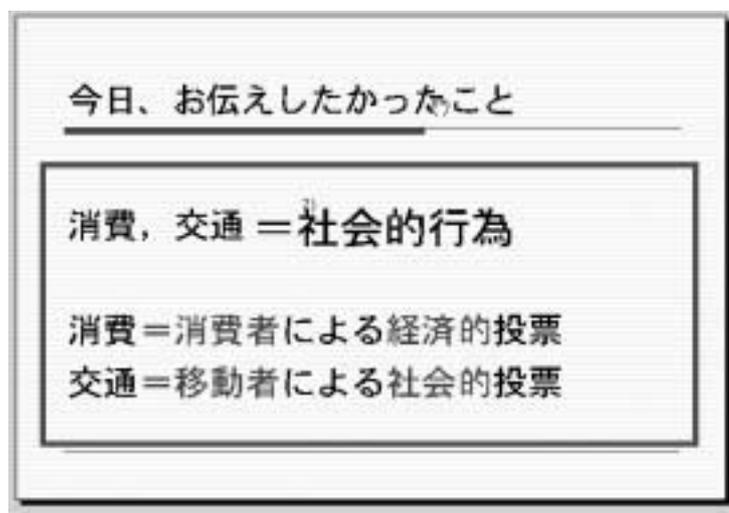
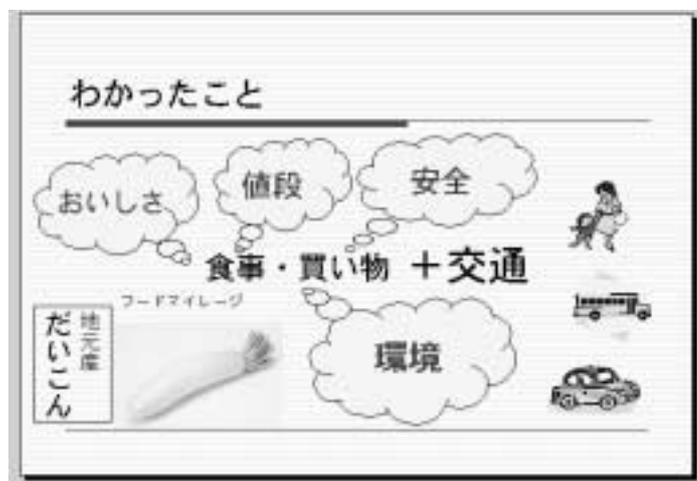
私たちが望んでいるからこそ、スーパーの品揃えも旬に関係ない食材が並ぶことになるんだと思います。私も実はこのゲームを担当するまで、全然旬のことなど何も考えないで買い物をしていましたが、実は旬はずれの食材はよく見てみると、すごく産地が遠いんですね。そこで、旬の食材を考えて料理を作るようになりました。

そこで、今日お伝えしたかったのは、消費、交通というのは社会的行為だということです。よく、消費とか交通というのは個人的な行為だというふうに理解されがちです。自分の好き勝手に買い物す

ればいいと思われがちですが、実は一つひとつが投票行為だと思います。『私は国内産を選ぶ』という、ライフスタイルを選ぶということと同じだということです。こういう社会を作りたいからこれを選ぶ、公共交通にも乗りますという意味表示になっていくと思います。ただ、私が言いたいのは、車に乗ってはダメとか、オレンジやバナナは食べてはダメとか、そういうことではありません。そういう禁止事項を言いたかったわけではなく、その背景を知るということ、皆さんの行動が一つずつ変わるのではないかとということです。そんな甘いことを言っていたらダメだという人もいるとは思いますが、やはり背景を知ることで投票行為に繋がっていくのではないかと考えています。

例えば病人が出たときには車で運んで一命を取り留めたりすることもあります。そういう時には公共交通を選ぶという意地は張らなくていいのです。お子さんがいて、郊外のショッピングセンターでしか買い物が出来ないということももちろんあります。それはそれで車がある恩恵だと思います。ただ、

実は車の問題には大気汚染の問題もあって、子どものぜんそくも1970年の大気汚染がひどかった時代よりも、今の方がぜんそくの児童数が増えています。その原因は自動車の排気ガスではないかと言われていて、環境省の方では大規模な調査をやっている最中です。もう公害は終わったという時代ではないのです。温暖化の問題も実はそうやって繋がっていることを考えて、私たちはどうしたらいいのかという“もやもや感”を抱えて皆さん、今日は帰っていただけたらと思います。



### <参加者からの質問>

Q.最近の新聞で、小麦粉の海外産はフードマイレージが大きいといいますが、国内産の方がトータルで考えたらCO<sub>2</sub> をたくさん出しているという記事がありました。というのは、国内の小麦粉は乾燥にかなりのエネルギーを使うということですが、そういうことを知ると、一概にフードマイレージだけでは見えないと思います。そのあたりも今後考えていく必要があるかと思います。先ほどのご説明のように、牛の飼料にもあれだけの穀物が使われているということがありますと、そのへんも考える必要があるかなと思いました。

A.(林さん) そうなんです。どんどん調べていくと、いろんな問題が隠されていることが分かってきます。小麦粉の問題もそうですし、近くで作ったハウスのトマトの方が遠くで作った露地物よりもCO<sub>2</sub> の排出量が多いということもあります。ただ、今日は距離を見るということで、単純化していますが、実はその裏にはもっといろいろな問題があるというふうに深めていってもらえたらいいと思います。大切なのは、まず自分の生活を見直すということです。割とこういう講座に来られる方たちは、意識が高い方が多いんですね。ですから、現代のチームでも、すごく配慮した買い物をするチームもあります。だからそういう小麦粉の問題をご存知の方も必ずいらっしゃるだろうというふうに思っていました。ただ、まだそんなに意識が高い方たちばかりではないのが現実です。そういう意味では、これは意識の高くない方たちにまず気が付いてもらうための入り口の教材だと考えていただけたらと思います。



## ■「食と交通と環境～学校給食の地産地消～」

＜全体＞

本日の参加者メンバー川崎 功先生(当時 高島小学校校長)より、学校給食の在り方として地産地消率をあげるためにどうしたらよいかを、参加者に呼びかけました。各テーブルで話し合い、発表しました。



### ●野菜の生産率が低い滋賀県において地場産物の給食をどう増やしていくか？

課題は学校給食における地場産物の活用状況にあります。滋賀県の地場産物は平成17年度においては15.5%。平成23年に25%以上を目指すとなっています。なぜこんなに低いのか。それは学校給食物資納入業者の応募資格が非常に厳しいということにあります。滋賀県の農業の現状も厳しいものがあり、滋賀県の耕地面積は5万ヘクタールですが、そのほとんどが水田です。水田率は現在91.1%で、全国で2番目。しかし、これを裏から見ると、実は野菜を作っていないことがわかります。そのような中、どうしたら学校給食の地産地消率が上げられるでしょうか。

#### 【資料】学校給食における地場産物を活用する割合(食材数ベース)

国の食育推進基本計画において、学校給食における地場産物を活用する割合を、平成22年度まで30%以上とすることを目指している。県においては、現在策定中の「(仮称)おうみの食育推進計画」において、平成23年度に25%以上を目指すこととしている。

	平成16年度	平成17年度	食育推進基本計画 目標数値
全国平均	21.2%	23.7%	平成22年度 30%以上
滋賀県平均	14.4%	15.5%	平成23年度 25%以上

- (注)1 公立小・中学校の完全給食実施校のうち各学校種ごとに、単独調理場方式の学校については50校に1校の割合で、共同調理場方式の学校については、50場に1場の割合の割合で選定した学校を文部科学省に報告した結果である。(滋賀県内 対象校 6校)  
2 6月と11月の第3週の各5日間の学校給食の献立に使用した食品のうち、県内で生産、収穫、水揚げされた食材の使用率(食材数ベース)である。  
3 調味料は除く。

#### ＜各グループ発表＞

【グループ1】3つのことを提案します。まず給食でパンやソフト麺をやめてすべて米飯にすること。それから、商品化できないような野菜を地域から給食にうまく利用することが出来ないかということ。あと、自分たちのふるさとの味の給食を食べよう日の献立を増やしていくことで、少しずつ改善できたらいいなという話が出ました。

【グループ2】今給食の残滓量ざんしが問題になっていますから、ランチルームを建ててそこで給食を食べる。そうすると残滓量が減ることにつながると思います。また、野菜の大切さを学校で訴えて、近くの野菜も使うという話が出ました。



【グループ3】一つは、休耕田を県がいくらか助成金を出して畑にしてもらうこと。それからパンや麺をやめて、地元産のお米を給食に使う。あとは、各学校に畑を作ってそこで子どもたちに野菜を作らせて給食にも使う。お弁当の日を増やそうという案が出ました。



【グループ4】まず、米食完全給食制にして、おにぎりの日を作るというのはどうだろうかという話が出ました。それから、地域のボランティアと協働で、学校菜園で食材を作って生きた食育をする。もう一つは、ダイニングルーム形式にして、作る総量を減らす工夫をしてはどうか。それから、こうしたことを実現するために、学校自体を小規模にしていってはどうかという案が出ました。

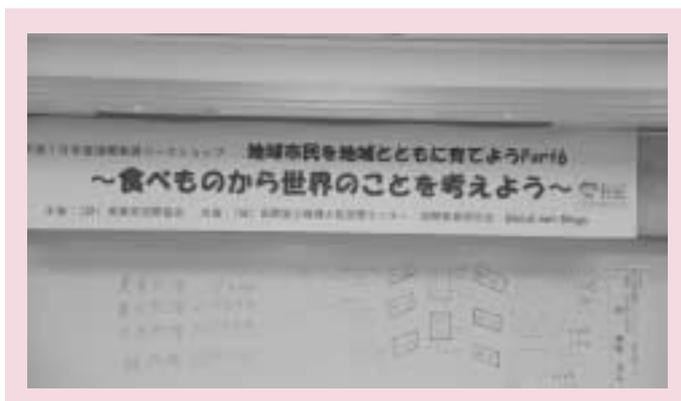
【グループ5】組合を作ったらどうかという案が出ました。市全体ではなく、ブロック制にしていくつかに分けると、8000食でも分担できるんじゃないだろうかということです。また「非常食を食べようという」という日がありますが、「粗食の日」みたいな給食を月2回ぐらいしたらどうかということです。

【グループ6】米飯給食100%。あと細かいところはお考えください。

【グループ7】私は栗東市でこの運動に取り組んできて、地産地消が実際に上がりました。その方法は主食の米飯化です。そうすると、実際に栗東市の学校給食はそれに伴って、地場の野菜を使う頻度が飛躍的に上がりました。なので、ご飯をすすめるということは、地場のお野菜の地産地消も進んでいくということなので、私たちはこれは事例として効果的な方法ということで、あちらこちらで報告をさせていただいています。



【グループ8】農家の方が野菜づくりに意欲を持てる環境を整えるために、補助金などの経済的な援助が大事じゃないかという話が出ました。また、滋賀の中で野菜づくりがあまりされていないということを知ってもらう必要があるという意見が出ました。

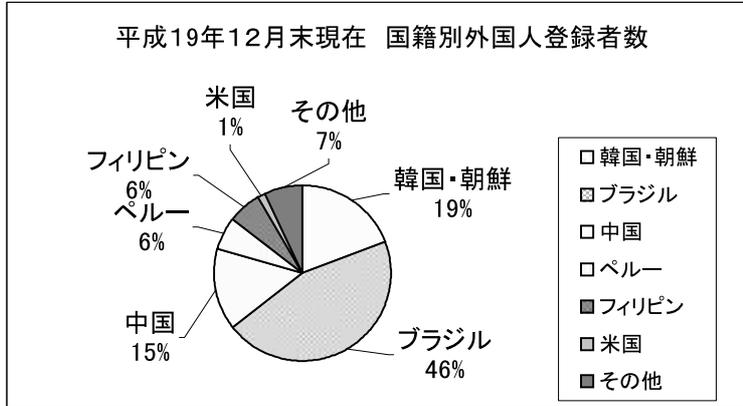


# 資料集

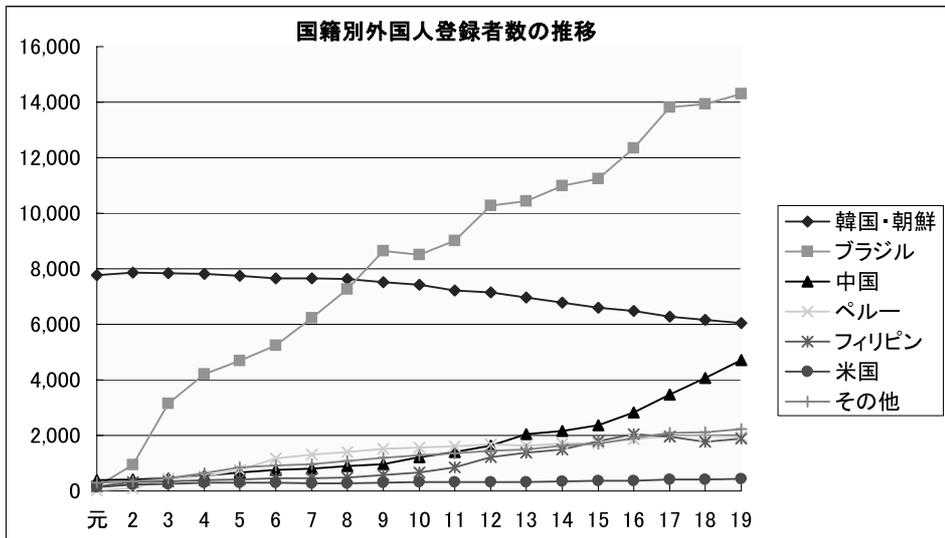


# 滋賀県における外国人登録者数

財団法人滋賀県国際協会 作成



国籍	登録者数
韓国・朝鮮	6,041 人
ブラジル	14,308 人
中国	4,708 人
ペルー	1,964 人
フィリピン	1,885 人
米国	442 人
その他	2,227 人
合計	31,575 人



## 外国人登録者数の比率が2%以上の市町村 (平成19年12月末現在)

市町村名	外国人登録者数	総人口	外国人比率	備考(上位3国籍)
1 湖南市	3,425	56,436	6.07	ブラジル2,145人、韓国・朝鮮398人、ペルー375人
2 愛荘町	1,058	20,258	5.22	ブラジル705人、中国129人、韓国・朝鮮70人
3 長浜市	4,168	85,071	4.90	ブラジル2,911人、ペルー381人、中国289人
4 東近江市	4,269	118,820	3.59	ブラジル2,808人、中国429人、韓国・朝鮮325人
5 甲賀市	3,126	95,765	3.26	ブラジル1,663人、中国414人、ペルー362人
6 安土町	346	12,529	2.76	ブラジル230人、韓国・朝鮮40人、中国21人
7 彦根市	2,373	111,378	2.13	ブラジル737人、中国619人、フィリピン339人
8 栗東市	1,333	63,680	2.09	ブラジル465人、韓国・朝鮮285人、中国225人、
9 虎姫町	119	5,846	2.04	ブラジル71人、中国 26人、ボリヴィア8人
県全体	31,575	1,409,877	2.24	

※滋賀県商工観光労働部国際課の調査に基づく。  
 ※県民44人に1人が外国人 (H19年12月末現在の統計から)

## 「国際教育研究会 **Glocal net Shiga**」について

私たち、「国際教育研究会 **Glocal net Shiga** (ぐろーかる ネット し が)」は平成 15 年 (2003 年) 4 月に立ち上がったグループです。名前にある “**Glocal**” とは Global + Local を結びつけた造語です。“**Think Globally, Act Locally**” (地球規模で考え、地域から行動する) という開発教育/地球市民教育/グローバル教育の地域社会に対する考え方を現すことばがあり、地球と地域を結ぶことばとして生まれました。

このような考え方をうけ、地元滋賀 (Shiga) で地域に根ざした人たちをつなぎ (Network)、みんなと一緒に地球市民を育む活動に取り組んでいきたいという思いが込められています。

### 会のねらいについて

- 地球上には、自国文化を含め、さまざまな生活・文化等があることを知り、多様性を受け入れること **多様性の尊重**
- 地域には、さまざまな文化背景や価値観等をもつ人びとがともに暮らしていることを認識し、多文化共生の意識を育むこと **多文化共生社会づくり**
- 世界と自分とはつながっていること、自分たちの生活と地球のどこかで起こっている問題が密接につながっていることを理解すること **相互依存関係の理解**
- 地球的課題を解決するために行動すること **公正・平和な社会づくり**  
など

こうしたことをねらいとして、さまざまな実践方法 (おもに参加型学習法) を学びながら、国際教育を促進することを目的としています。教育関係者・国際協力 NGO 関係者・外国籍住民・地域国際協会関係者、学生、青年海外協力隊 OV など、さまざまな立場や経歴の持ち主が参加しています。これまでに滋賀県の特徴を生かした題材をとらえ、「ブラジルボックス」・「カルタ “わたしん家 (ち) の食事から”」などの教材を開発してきました。また、より多くの方に国際教育を体験していただくよう年数回、国際教育ワークショップを開催しております。今後も幅広い知識や情報の交換を行い、より深みのある内容を取り上げていきたいと考えています。

### 入会について

毎月 1 回日曜日に例会を開催しています。さまざまな経歴のメンバーが集まるクラブ活動のような会です。渡航経験や語学については、まったく心配していただく必要はありませんので、この研究会にご関心のある方は、お気軽に下記までお問い合わせください。

国際教育・開発教育についての企画相談、講師派遣も随時承ります。

<お問合せ先>

**財団法人滋賀県国際協会** 担当 大森

〒520-0801 滋賀県大津市におの浜 1-1-20 ピアザ淡海 2 階

電話: 077-526-0931 ファックス: 077-510-0601

E-mail: omori@s-i-a.or.jp

## 研究会19年度の活動について

開催日	内容
4/22	年間事業についての話し合い 丸山まり子さんによる「子どもの人権を学ぶワークショップ 権利の宝箱」体験
5/20	滋賀県総合教育センター「10年経験者研修」についての話し合い、研修の流れについて
6/24	滋賀県総合教育センター「初任者研修」についての話し合い、研修の流れについて 「10年経験者研修 高校教員の部」で紹介するGNI(国民総所得)を活用したワークショップ体験
6/26	滋賀県総合教育センター「10年経験者研修」にて「ブラジルボックス」「権利の宝箱」「貿易ゲーム」 「GNIに基づいた富の分配」ワークショップ実践
7/1	きらり☆NPO・ボランティア活動フェアにて 活動紹介
7/22	「10年経験者研修」報告、「初任者研修」について話し合い
7/23	滋賀県総合教育センター「初任者研修」にて「世界がもし100人の村だったら」「ブラジルボックス」 「多文化保育フットラングージ」実践
8/3・4	滋賀県国際協会主催「第1回国際教育・多文化共生教育スタディツアー」(希望参加) 横浜市立いちよう小学校、海外移住資料館 訪問
8/22	滋賀県国際協会主催「第2回国際教育・多文化共生教育スタディツアー」(希望参加) ワールドアミーゴクラブ、滋賀ラテン学園 訪問
9/16	おうみ多文化交流フェスティバルにて 国際教育ブース出展 「カルタ わたしん家の食事から」「オリジナル国旗をつくってみよう」など実践
10/14	「国際教育・多文化共生教育スタディツアー」報告、「多文化交流フェスティバル」報告、 会則改定、会長選出について話し合い、新教材開発
10/27	彦根市立稲枝中学校にて「世界がもし100人の村だったら」実践
11/11	滋賀県国際協会主催「第3回国際教育・多文化共生教育スタディツアー」(希望参加) 滋賀朝鮮初級学校 訪問
11/18	「ケータイの一生 ワークショップ」ミニ体験、新教材開発
11/22	滋賀県国際協会主催「第2回国際教育・多文化共生教育スタディツアー」(希望参加) 湖南市立水戸小学校日本語教室、日本語初期指導「さくら」教室 訪問
12/15	新教材開発
12/16	2007年度開発教育セミナー「関西からの発信！ 私たちのくらしとESD(持続可能な開発のための教育) 教材体験フェスタ」(大阪)にて「カルタ わたしん家の食事から」実践
1/19	国際教育ワークショップ「地球市民を地域とともに育てよう part6」開催 食べ物をとおして世界のことを考えよう ファシリテーター：清家弘久さん、林 美帆さん
2/17	県内外国人児童在籍集中校の日本語教室の授業風景ビデオ観賞、右田マリアナ春美さんより、 外国人児童生徒の状況について話を伺う、新教材開発(参考になる教材の体験など) 2007年度開発教育セミナー(大阪) リソースとして参加
3/16	新教材開発(参考教材体験「ピン君に何が起こったか」「学校マップ」「物カード」ワークショップ) 次年度の活動について



権利の宝箱ワークショップ



オリジナル国旗をつくってみようワークショップ

## 国際理解・開発教育教材の紹介および貸し出し規定について

(財)滋賀県国際協会

当協会では、国際理解教育および開発教育に関する資料・教材（ビデオ等も含む）を405点（H19年度末現在）所蔵しており、自由に閲覧・視聴することができますので、お気軽にご利用ください。

なお、当協会ホームページからも教材目録、貸出申請書様式が入手できます。

<http://www.s-i-a.or.jp/globalnetshiga/kyouzai/kitei.html>

### <利用について>

- 閲覧・視聴      どなたでもご自由にご利用いただけます。  
ただし、事務所に保管しておりますので、閲覧を希望される場合は、職員にその旨お伝えください。
- 利用時間      日曜日から金曜日まで（休日を除く） 午前9時から午後5時まで
- 貸出      原則として、会員および団体（学校を含む）に限ります。  
所定の貸出申込書にご記入の上、当協会窓口にご提出ください。  
  
貸出期間：2週間以内（申請により期間延長可能）  
貸出冊数：1回5点以内
- 返却      当協会窓口まで直接ご返却ください。やむを得ないと認められる場合は、借受側の料金負担のもとに郵送・託送を認めます。  
なお、破損、紛失の場合は実費をご負担いただきます。



お問合せ先 **財団法人 滋賀県国際協会**

〒520-0801 大津市におの浜 1-1-20 ピアザ淡海 2階

電話 077-526-0931 ファックス 077-510-0601

HP <http://www.s-i-a.or.jp> E-mail [siamail@mx.biwa.ne.jp](mailto:siamail@mx.biwa.ne.jp)